

## KAAT 神奈川芸術劇場 2020 年度ラインアップ発表会登壇者コメント

※公演時系列順

白井晃(KAAT 神奈川芸術劇場 芸術監督)

／「アーリントン」[ラブ・ストーリー]、音楽劇「銀河鉄道の夜」、**「コーカサスの白墨の輪」**、神奈川芸術文化財団芸術監督プロジェクト オペラ「モモ」全3幕 演出

KAAT 神奈川芸術劇場は、開館から 10 年目のシーズンに入ります。東日本大震災が起きた 2011 年にオープンしましたが、その間日本を取り巻く環境、世界情勢は大きく変わりました。私自身も KAAT に携わるようになって 7 年目に入り、ラストシーズンとなります。2019 年は充実したラインアップをお届けすることができたと思っています。今回のラインアップの狙いとしては、東京オリンピック・パラリンピックで熱狂的な雰囲気が日本中を取り巻くことになるかと思いますが、その中で見逃しがちなことに目を向け考えました。

2020 年 9 月から 2021 年 3 月までは 10 周年アニバーサリーとして、記念企画を設けさせていただきます。記念碑的な作品や、さらに前衛的なものも打ち出したいと考えています。また、10 周年を記念し、新しいロゴをデザイナーの佐藤卓さんに作っていただきました。このロゴが劇場で皆様をお待ちしておりますので、ぜひそちらにもご注目いただければと思います。

私が演出する作品としては、シーズンスタートとしてエンダ・ウォルシュ作の『アーリントン』、そして 10 周年のキックオフとなる音楽劇『銀河鉄道の夜』、10 周年の記念日(1 月 11 日)に開幕するプレヒトの『コーカサスの白墨の輪』、そしてオペラ『モモ』があります。

『アーリントン』は 2 年前に上演した『バーターク』で出会った作家、エンダ・ウォルシュの不思議な魅力をもう一度、南沢奈央さん・平埜生成さんら若いメンバーと共に作り上げていきます。『銀河鉄道の夜』は私がまだ 30 代の頃、青山劇場の 10 周年記念として上演された作品で、今回は当時と同じクリエイターが終結し、再び KAAT10 周年事業として蘇らせるというものです。そして『コーカサスの白墨の輪』は芸術監督就任以来毎年取り上げてきたプレヒト作品を、大・中スタジオ、そしてアトリウムと3つの空間を使い仕上げるとこの劇場ならではの手法にチャレンジします。ミヒヤエル・エンデ原作のオペラ『モモ』は神奈川芸術文化財団芸術総監督である一柳慧(いちやなぎ・とし)先生が作曲されており、今まで神奈川県民ホールで 2 度上演されていますが、今回 20 年ぶりに私の演出で上演いたします。KAAT で純粋なオペラを上演することはないのですが、オペラの手法を逸脱した方法で上演できないか考えており、一柳先生にも賛同いただいています。

東京との距離感の中で、KAAT でどのような劇場像を作り上げるべきか、試行錯誤しながらやってまいりました。逆に東京ではできない作品群を上演し、演劇界的“事件”を起こしたいと思いながらやってきました。

その結果どう評価をいただいているかは、皆様にお任せしたいところですが、劇場としてどういふものを打ち出せるのか、まだまだ挑戦していきたいと思っています。

### 清水恒輔／アーリントン連動企画「メロポリス伴奏付上映会 ver.2020」作編曲・演奏

この上映会は以前金沢の映画祭の依頼から始まったのですが、阿部海太郎さん、生駒祐子さん、装置の巽勇太さんとともに創った、約100分弱の映画と全曲書下ろしの音楽の上映会です。映画『メロポリス』は1927年のドイツで製作された、発展しすぎた資本主義社会により労働者と支配階級と極度に二分された社会の姿が描かれており、今の社会にも通ずる作品です。本日は実際に本番で着用する衣装を着ていまして、出演者は作業服を着用し背番号を付けています。サイレント映画ですが、演奏は勿論のこと、映写技師と字幕係、照明・音響オペレーターも稼働しており、熱量のある現場になるかと思えます。会場内で16ミリフィルムをまわす機械の駆動音も感じながら、100年前にどのように映画が見られていたか、皆さんに追体験をお楽しみいただきたいと思います。

### 桐山知也／アーリントン連動企画 リーディング公演「ポルノグラフィ」演出

イギリスで注目を集めている劇作家サイモン・ステューヴンスが2007年に発表した作品です。ロンドンオリンピック開催が決定した翌日に起こった2005年のテロ事件をモチーフにしています。「この芝居は何人の俳優で演じてもいい。また7つの章をどのような順番で上演しても構わない。」という不思議な作家の指示で始まるこの作品を、奇しくも東京オリンピック・パラリンピックが開催される今年発表出来る事実、ぼく自身ヒリヒリするような思いでいます。白井さんからこのお話をいただいた時、本当は白井さん自身が演出なさりたいのだな、と感じました。その白井さんの「想い」を受けて、KAATで創作できることに興奮しています。人と人はどうやって繋がることのできるのか、どうやって断絶してしまうのかを考えられればと思っています。

### 富安由真／KAAT EXHIBITION 2020「富安由真展 | 漂泊する幻影」

私は現代美術作家として、主に絵画作品やインスタレーション作品、映像作品などを創作・発表しています。科学では解明されていないことや、現代社会では非合理的だと考えられているような事柄、例えば心霊現象や超常現象などに関心があり、それを題材に作品作りをしていて、その中でも現実と非現実の境目があいまいになるような体験をしていただけるようなインスタレーション作品を手がけています。本来劇場という場所には演者がいますが、私の作品には人は登場せず、あるのは人の痕跡だけという“不在性”が大事な要素になっています。今回はその“不在性”というものを劇場という空間でどのように表現できるかを考えて制作・発表していきたいと思っています。

### 岡田利規／「未練の幽霊と怪物」作・演出（※ビデオメッセージより）

能における主人公・シテは、生きていた間に実現したいことがあったのにそれが果たされないまま死んでしまい成仏できずにいる幽霊であることが多いです。そして幽霊たちが願いや思いを果たせない理由はえてして社会的・政治的なことに帰因します。こうした能の構造を用いた、2つの作品を発表します。一つめは建築家のザハ・ハジドが、もう一つは高速増殖炉もんじゅがシテです。2つの作品の間に狂言のようなものを挟んだ上演に仕立てます。それを今年の6月、つまり7月の1ヵ月前という実にベストなタイミングで公演します。自分としてはたいへん興奮しています。皆さんも興奮してください。

### 松井周／KAAT キッズ・プログラム 2020「さいごの1つ前」作・演出（※ビデオメッセージより）

今回の作品は、ある老婆が亡くなった後に天国に行くための場所に来るのですが、その条件を満たしていないために彼女は天国に行くことができない。今回その老婆役を白石加代子さんにやっていただき、子供たちと一緒に認知症である老婆の記憶を探すことをしてもらおうかと思っております。僕はいつも人類絶滅・地球滅亡みたいな作品を作ることが多かったんですけども、初めて作る子供向けの作品なので今回は基本は楽しいものを、楽しい場を作りたいと思っております。どうぞお楽しみに。

### 松原俊太郎／「君の庭」作

KAAT×地点と新作をつくる際に良いことは、記者発表のために、早くタイトルが決まることです。『君の庭』というタイトルに決まり、嬉しくなって知り合いに告げると、だいたいのひとが『君の名は』？ と聞き返してきました。『君の名は』とは、もしかしたら、関係するかもしれません。

僕は書くときいつも「型」を使います。『山山』では近代劇の形式でしたが、今回は「法廷劇」です。登場するのは、日本で一番知られているファミリーです。法廷劇となると堅苦しいのでは、と思われるかもしれませんが、「型」は僕や地点が扱うと無残にも消え、別物に変化します。「よい残骸」みたいなものを残したいと思います。また今作では、地点の特徴である「叫び」とはまた違う何かを観ることができるかと思います。

### 谷賢一／新作「人類史(仮)」台本・演出

2年前『三文オペラ』でホールでの演出を経験した後、白井芸術監督から何か興味がある題材はないかと問われ、人類の歴史を演劇化したいと提案しました。具体的には、直立二足歩行の確立、言語の獲得、火の使用を始めて闇を追い払う瞬間、動物とさして変わらなかったネアンデルタール人たちが高度なコミュニケーションと社会性を持ったサピエンス、すなわち現生人類に生まれ変わる様を演劇として表現します。音楽は、『三文オペラ』で盟友となった志磨遼平さんにお願ひし、音楽の誕生の瞬間も描きたいです。また、振付としてイスラエル人ダンサーのエラ・ホチルドという素晴らしいクリエイターが参加します。国の垣根を越えて人類の起源を探っていくような壮大なプロジェクトになり、最終的には西暦 1500 年頃の大航海時代、そして科学が宗教に代わって世界を変えていく技術革命の時代までを描きます。

## 森山開次／KAAT DANCE SERIES 2020「星の王子さま—サン＝テグジュペリからの手紙—」振付・演出・出演

白井さんと初めてご一緒したのが(2005年に白井さんが演出した)『星の王子さま』で、僕にとって思い入れのある作品です。身の引き締まる思いと同時に、とても興奮しています。言葉が美しく哲学的な作品ですが、そういった作品に身体表現で迫っていくことは挑戦でもあります。どのように魅せていくのか大きな課題ですが、楽しんで創作したいと思います。

「サン＝テグジュペリからの手紙」という副題をつけていますが、ただ物語をなぞるだけではなく、作者の生涯や想いを、一度解体して再構築していく作業をします。郵便飛行士でもあったサン＝テグジュペリは、飛行体験をもとにした小説を沢山書いており、『星の王子さま』にも飛行士としての彼の想いが描かれています。彼の想いを深く読み解きながら、子供から大人まで楽しめる、誰も見たことない『星の王子さま』を創りあげたいと思います。

## 小野寺修二／KAAT DANCE SERIES 2020 新作 演出・振付

今回白井さんから何か作品を作ってくれないかとお話があり、「何でも好きなことを」と言われて色々考えて提案したのですが、「小野寺さんらしくない」と納得してもらえず、改めて自分は何をしたいのか、何ができるのかを考えました。そこで自分の出自であるパントマイムについて、ここ10年おろそかにしていると改めて思い直し、今回の作品ではセリフを使わずに、特にアジアということ 키워ワードにして、自分にできることを起点に準備を始めています。よくわからないけれども魅力的なものを探したいのですが、“わからないもの”は恐怖や無関心の対象になってしまいがちで、そういうものに対して好奇心を向けられたらと思います。この作品はそのスタートになる作品であり、自分のここ10年やってきたことを形にする機会として張り切りたいです。

## 多田淳之介／日韓共同製作「外地の三人姉妹(仮)」演出

2008年から韓国で作品を作り始め、10年以上、年に1回程のペースでやっているのですが、2年前に『가모매 칼메기』の再々演を KAAT で上演して以来、久々の日韓共同製作です。チェーホフの「三人姉妹」を翻案した作品で、『가모매 칼메기』同様 1930年代、40年代の朝鮮半島が舞台です。朝鮮半島に住んでいる日帝軍人の家族・三人姉妹が東京に戻ることを夢見ており、その家の長男に朝鮮人の嫁がやってくるという設定に置き換えています。「モスクワへ(帰りたい)」と言われていまちピンとこなくても「東京へ(帰りたい)」と言われると他人事ではなくなります。日韓の歴史が下敷きではありますが、チェーホフに出会い直すような作品でもありますので、チェーホフのファンの方にも楽しみにしていただきたいと思っています。

### 杉原邦生／新作 演出（※ビデオメッセージより）

僕はこれまで 2015 年の KUNIO12『TATAMI』という作品から毎年のように KAAT で公演させていただいていますが、6 回目となる今回はこれまでの作品の延長上にあるような作品になると思います。内容は現在、絶賛打ち合わせ中ですが、劇作家の瀬戸山美咲さんに書き下ろしの新作をお願いしました。現代社会を生きる若者の姿を、瀬戸山さん独自の視点から鋭く切り取った作品になるんじゃないかと思っています。これまでの5回は大スタジオで作品を発表してきましたが、今回は大きいホールでの上演になります。この劇場は本当に色々な使い方ができて、ホールの空間をどのように使おうか、これからスタッフの皆さんと力を合わせて考えていければと思っています。白井芸術監督の最後の年に素敵な作品をお届けできればと思っていますので、ぜひご期待ください。

### 長塚圭史(KAAT 神奈川芸術劇場芸術参与)／「セールスマンの死」演出

僕は再演が大好きです。日本にはロングランの仕組みがありませんが、次々に新しいものをやるのではなく、丁寧に見つめ直す時間があると作品の質も良くなり、繰り返されることにより深みが増していくところがあると思います。アーサー・ミラーの作品を演出したのは『セールスマンの死』が初めてでしたが、構成の素晴らしさ、時間の交じりあい非常に優れています。テーマも現代性を失わず、時間が過ぎていく中で時代に取り残された男の姿が見えてきますし、世界中に通用する家族の深い業が描かれています。見逃した方たち、そして前回ご覧いただいた方も、前回からのたった2年間で現実世界もどれだけ時間が進んでいるか感じながら観ただければと思います。非常に鮮度の高いものになると思いますので、ぜひ劇場に足を運んでください。

(参与として KAAT について)様々なアーティストが行き交う場所として非常に活気のある劇場だと思っています。白井さんとずっと話してきたことですが、この劇場が近くを通る人にとってついつい入ってしまうような開かれた場所になり、訪れた人たちが働く人たちと声を掛け合う関係となればと思っています。21 年度を見据えながら、20 年度も引き続きサポートしていければと思います。

### 野村萬齋(世田谷パブリックシアター芸術監督)／『子午線の祀り』演出 ※頂いたコメントを白井監督が代読

1979 年の初演以来ほぼ 40 年、平家物語に材をとった木下順二の傑作戯曲『子午線の祀り』は、日本の演劇界を代表する様々な出自の俳優、スタッフの手により幾度となく上演が繰り返され、今日まで受け継がれてきた大作です。私も 1999 年より平知盛を演じ、2017 年には演出者という立場からもこの作品に携わることになりました。世田谷パブリックシアターでは 2004 年より本作を企画制作して上演を重ねてきましたが、この 2017 年版は読売演劇大賞の最優秀作品賞をはじめ数多くの賞を受賞することができました。唯一の心残り、各地での上演が叶わなかったことです。今回は KAAT に始まり各地の劇場と手を携えて上演を果たすべく、2020 年度版としての新たな『子午線の祀り』を立ち上げたいと思っています。進化していく『子午線の祀り』に是非ご期待ください。